

じんけん

JINKEN
第144号
(通巻 271号)
2022年3月3日発行

INDEX

特集

What'sじんけん 共に生きる社会をめざして その6

わたしたちは「通用するまで努力し続ける社会」をめざすのか 8

第34回臨時総会 2

～ Zoomによるオンライン開催 ～

オープン講座 2

第2回出前講座・第4回・第5回

各地区代表者研修会を終えて 4

～ 県人教事務局とつながってみませんか ～

今年度の「部落差別解消に向けた

スキルアップ学習会」について 6

都同教、「南葛」の桐畑さんのこと 10

こどものまなざし 11

「十人十色」日田市 S・Nさん

ちゃみちゃん & じょんくん 11

「あー、会いたいなー」の巻

INFORMATION 12

第15回ヒューライツ作品展 入賞作品の紹介



 公益社団法人
大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

大分県大分市大字下郡496-38 大分県教育会館内
TEL: 097-556-1012 FAX: 097-556-0864

URL <http://kjkkoita.jp>
E-mail hello@kjkkoita.jp



大分県人教の
ホームページは
こちら

印刷 小野高速印刷(株)

第34回臨時総会 ～Zoomによるオンライン開催～



新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、2月24日(木)に大分県教育会館で開催予定でした臨時総会を、急遽Zoomによるオンライン開催に変えましたが、各研究会を代表する表決権者30人(代理出席を含む)、理事・監事11人のみなさんが対応してくださいました。今回は、「部落問題学習実践講座」の新設、「部落差別解消に向けたスキルアップ学習会」の廃止、ヒューライツフォーラムの準備にかかる日程の入れ替え、事務局運営費の調整などを中心に提案し、全て了承していただくことができました。

オンライン開催で発言しにくい中でしたが、表決権者のみなさんから意見が出されました。まずは、竹田市の義務制研究会から、ヒューライツフォーラムの地元準備を進める中で感じたことを、次年度開催の杵築市の支援につなげてほしいという具体的な意見をいただきました。また、大分市の義務制研究会からは、2,400人を超える会員を有するものの、たった13人の事務局員で連携をとっている状況を詳しく伺いました。今後も県人教事務局と持続可能な形で連携をとれるように、事務局同士の懇談会を設定してほしいという意見でした。

出された意見・要望に対しては、積極的に対応していくこととなりました。現状にあわせて県人教事務局がどのように変わるのか、各地区研究会の運営時の困りに県人教ネットワークがどのように連携していけるかを、随時協議しながら対応していくことを共通理解できる総会となりました。



オープン講座

第2回出前オープン講座(日田市社会人権教育研究協議会連携)

「ネット人権侵害と部落差別の現実」～「寝た子」はネットで起こされる!?～

川口 泰司さん(一般社団法人 山口県人権啓発センター)

1月25日(火)に、出前オープン講座を日田市で行いました。県人教の感染症対策のガイドラインに従って、当日は現地開催を行わない決定をし、Zoomをつかったオンライン開催へと変更しました。



県内各地で川口さんの講演を聴きましたが、オンライン開催でテレビの中にいる川口さんが、一緒に喫茶店に入って私に向けて話をしてくれているような錯覚もあり、いつも以上に集中してお話を伺いました。

実際にネット上で広がる差別事象に向けて、自分のすぐそばに部落差別が起こっていることを、自分自身の意識を変えていく必要と共に再認識していくことができました。ビーカーの底にたまった泥をそのままにして「なんとか水が澄んできたぞ」ではなく、しっかりとなかまと共にかき混ぜながら、一つひとつの沈殿している泥を取り除いていきたいと思いました。

今回の出前オープン講座を依頼してくださいました、日田市社会人権教育研究協議会の仲さんからのコメントもP5に掲載していますので、そちらもご覧ください。

第4回オープン講座

「子どもの行動上の問題の理解と対応」－児童自立支援施設の実践から－

相澤 仁さん（大分大学）



1月20日(木)に、出前オープン講座の一枠をつかって、通常のオープン講座を1回増やす形で大分県教育会館大ホールにて現地開催しました。新規陽性者数が増え続ける中での開催でしたので、参加者は通常より少なめでしたが、実際に出会ってきた子どもたちの姿を交えての講演に多くの学びをいただきました。

また、大分県内で広まりつつある「子どもアドボケイト」の紹介もありました。なかなか自分の気持ちを伝えづらい子どもたちの思いを聞きとり、その子たちだけのマイクのような立ち位置で思いを代わりに伝えていく取り組みでした。今年度のヒューライツフォーラムの大会冊子にも報告を掲載しているので、是非ご覧ください。

◇子どもたちは、意図することなく何気なく自然に言った言葉や態度に影響を受けやすく、形とならない栄養が含まれているという話にまったくその通りだと思いました。自分は忘れていても子どもたちが覚えていて驚いた経験を思い出しました。

◇向き合うことの大切さを強く強く感じさせられました。

①何回も何回もセールスする気持ちで！意欲をもって向き合うこと

②「あなたが反発しても好きだよ」というメッセージを送り続けること

一人ひとりを大事にするまなざしをもててこそ“人権”。たくさんの学びをありがとうございました。

第5回オープン講座

「みんなでつくる みんなの学校」

木村 泰子さん（大阪市立大空小学校 初代校長）

県人教の定例研修会である進路・学力保障学習会とのタイアップ開催としてオンラインで行った第5回オープン講座には、県内から約70人の参加がありました。映画「みんなの学校（2014年制作）」の舞台でもある大空小学校の初代校長だった木村さんを講師に、おとなも子どもも関係なく、みんなでつくる、子どもが主語になるようなみんなの学校についての講演となりました。

講演が始まってしばらくすると、木村さんの提示したパワーポイントの画面に何やら赤い軌跡が出たり消えたり…。しばらく続くので、主催者の方から講演への協力とPC操作をしないことをお願いすると、その後赤い軌跡は画面上に現れなくなりました。

講演終了後に、赤い軌跡の関係者から連絡が入りました。その方は養護教諭の方で、保健室に来ている子どもたちと一緒に講演を聴いていたそうです。別のことを対応している間に、見ている子どもが操作したそうでした。その後は一緒に見るようにしたので、その子が操作することはなくなりました。話を聞くうちに「こんな学校、ホントにあるん？」と子どもからの問いかけがあったそうですが、「そうなんです」とだけ答えて最後まで一緒に話を聞いたそうでした。



子どもと一緒に見てくださっていることをまったく想像もできずに指摘をした自分がとても恥ずかしく感じています。この方のように、おとなだけの学びとせずに一緒に学んでいける、子どもたちが主語となる人権のまちづくりを進めたいと強く思いました。

各地区代表者研修会を終えて

～ 県人教事務局とつながってみませんか ～

大分県人教では、義務制教育16研究会・高校教育8研究会・社会教育7研究会（市町村としては18）の代表者のみなさまと連携しながら1年間の事業を行います。

2月24日（木）に、今年度最後の各地区代表者研修会をオンラインで開催しました。今年度の事業のふり返りとともに、次年度杵築市で開催するヒューライツフォーラムについての協力も要請しました。

また、各地区代表者のみなさんには県人教事務局と連携した事例を報告していただき、各地区研究会がそれぞれの地域課題を解決していくために、県人教事務局とどのようにつながれば良いかを議論することができました。その中のいくつかの連携事例を紹介します。

玖珠郡人教研修会での連携をとおして

玖珠郡人教では、所属する郡内幼稚園・こども園、小学校、中学校、両町社会教育課から人権教育・啓発に関する実践レポートを提出してもらい、実践集「同教くす」を編集しています。今年度で第45集になります。



10月の郡担当者会で、県人教事務局に講師をお願いし、レポート作成に向けての研修を行いました。事前の打ち合わせでは「差別の現実を見ているか。子どものしんどさや保護者の願いが書けているか。」「教職員の振り返りや気づき、思いが書かれているか。」等の視点をもってレポート作成ができるよう研修をお願いしました。

研修会当日は、「レポートに綴りたいこと～わたしの中の『差別の現実』と向き合うために～」と題し、「綴ることから自分の実践を見直すことができる」こと、「子どもの願いや姿があるか」「子どもたちを中心に考える自分があるか」の視点の大切さを教えていただきました。さらにレポートを第1階層～第9階層という段階で表現し、その視点を他のレポートで例示してもらいました。

県人教事務局には2年連続でこの研修をお願いしました。各校担当者が持ち帰ったこの研修内容をもとに、各職場ではレポート作成を進めることができました。

玖珠郡人権教育・部落差別解消推進研究協議会 岩下 厚志さん

連携校研修会を開催して

別府市の研究会は本年度から、別府市人権教育・部落差別解消推進研究会と名称変更をしました。本研究会は今後もこれまで以上に、人権問題・部落差別問題について会員が学び、子どもたちに差別をしない・させないことの大切さを伝えていきたいと考えています。

別府市内各校の人権学習の研修では、担当者が工夫して行っています。そんな中、北部中学校から部落差別問題の校内研修で講演会の講師を探しているという相談がありました。そこで、本研究会との連携として、県人教に講師派遣を依頼したところ快諾してくださいました。

当日は、クイズから和やかな雰囲気始まり、「県内での同和教育の変遷」「人権8課題と部落問題学習」などの私たちが知るべき重要な内容を語ってくれました。最後は「今現在の部落差別について」という項で、SDGsを学習ツールとして人権教育・部落問題学習に利用するということを語ってくれ、私自身「そのような学習指導方法もあるのか」と驚かされ、実践の意欲がわきました。



コロナ禍で様々な差別問題が露呈してきていると思います。このようなときだからこそ、各校での校内研修は必要です。今回の講演会は私たちにとって、改めて差別を許さない気持ちにさせてくれました。県人教事務局のみなさん、ありがとうございました。

別府市人権教育・部落差別解消推進研究会 平野 貴之さん

模擬授業を受けてつなげたこと

昨年10月、大分県人教の事務局から、「スキルアップ研修会で提案する模擬授業をどこかの研究会で受けてもらえませんか」というメールをいただきました。大分市人権・同和教育研究会の事務局は、月に数回の会議を開いているので、事務局内研修という形でお願いすることになりました。市同教主催の研修会で教科書無償化について紹介したこともありましたが、そこに「SDGsとつなげる」という新しい視点を入れることで、「昔の出来事」ではなく、「今の自分たちとつなぐ」ことができるというのが、素晴らしいと思いました。また、いろいろな活動や学習につなげることができる取組だと思いました。



是非校内でも還流したいと思い、校内研の時間に、いただいたパワーポイントや資料を使いながら、提案と模擬授業を行いました。「教科書無償の闘い」について詳しく知らない先生も多く、またSDGsとつなぐという視点は「自分ごと」として考えるツールとして、いろいろな活動や学習にも使えそうだと好評でした。今回の取組は、市同教が発行している実践資料集にも掲載させてもらえることになり、大分市の先生方に広く紹介することができることになりました。研修内容や資料提供など、県人教と連携しながら、各地区研究会から一般会員さんに伝える場がこれからも増えていくといいなあと思います。

大分市人権・同和教育研究会 後藤 有紀さん

出前オープン講座に応募して

日田市社人研では、県人教で募集のある出前オープン講座に応募しました。これは、県人教主催で行っているオープン講座を希望の場所で開催していただけるものです。招聘したい講師や聞きたい内容・日程等もこちらの希望に沿っていただけます。

当初、市民文化ホールで100名程度を集客し開催する予定でしたが、開催日1週間前くらいから、新型コロナウイルス感染症の急拡大により、急遽、対面形式での講座を中止せざるを得なくなりました。どうしても拝聴したい内容の講演でしたので、なんとか別の形での開催を模索していたら、県人教の方でZoomによるオンライン開催を提案していただき、実施してくれることになりました。オンライン開催に伴う諸準備については、すべて県人教で対応していただきました。集客予定であった参加申込者については個別に自宅や職場でZoomにて安全に参加していただくことができました。



オンライン開催となり、参加者のアンケート等から、講演後の感想を確認することができませんでした。希望した講師の先生のご講演を聴くことができ大変勉強になりました。

コロナ禍で、やむを得ず人権の講演会や研修会等が中止となってしまうこともあると思います。しかし、コロナ禍だからこそ、コロナ感染者に対して身近に差別が発生したりし兼ねない現状があると思います。日々、その意識や人権感覚を磨くためには、講演会や研修会は必須だと思います。この制度を活用すれば、組織の人権啓発に役立つことだと思います。みなさんも出前オープン講座に応募してみてくださいませんか？

日田市社会人権教育研究協議会 仲 愛奈さん

県人教事務局と連携を重ねて

臼杵市では、5月の総会で行われる予定だった全員学習会を夏休みのZoomによるオンライン研修に変更しました。県人教が募集していた、出前オープン講座に申し込んでいたので、一法師英昭先生の講演を各学校に配信していただきました。2年連続で中止になりかけた研修が形を変えて実現しました。



また本市では「戸室台解放学習会」が社会教育と連携して年間に4回行われています。その中の1回は県人教事務局に講師派遣を要請しました。面接時における違反質問のワークショップに参加しましたが、高校入試や就職面接の現状が分かり、実際に質問されることで、自分ごととして考える研修ができました。

また、小学校校内研修（指導案検討や授業研）への派遣依頼にも快く対応していただいたり、中学校の研究大会や進路保障総会では、人権学習パネルを借りてお世話になったりと、私たちとつながらせていただくたびに県人教事務局がより身近で頼もしい存在となっています。

これからも様々な団体との連携の場が続きますが、県人教のみなさんに相談や派遣の依頼をしながら、私たちの研修を充実させたいと思います。

臼杵市部落差別解消推進・人権教育研究会 佐々木 祐子さん



各地区研究会を窓口に、連携のアイデアをお寄せください！

今年度の「部落差別解消に向けたスキルアップ学習会」について

第1回学習会

7月2日に「部落問題認識を深め、研修・学習をするために」というテーマで全体研修をしました。義務制30人、高校16人、社会教育関係8人の参加でした。

(1) 部落問題の関係する法律・答申で押さえてほしいこと

1965年8月11日同和对策審議会答申…この答申が出された8月を大分県では「差別をなくす運動月間」と定めている。この答申の今でも通用する大事な部分として

- ・同和問題の早急な解決は、国の責務であり、国民的課題である。
- ・部落差別が現存するかぎり、この行政は積極的に推進されなければならない。
- ・環境改善対策、差別に対する法的規制、司法的救済が必要であると明記。

1996年5月の地域改善対策協議会意見具申では、もう一度「同和問題は過去の問題ではない」と指摘し、同和問題に関する特別対策事業は1997（H9）年3月末で終了し（注：実際は2002年3月まで延長された）、一般対策に移行すべき。

2002年3月 地対財特法失効…同和对策関係の特別事業法は「法切れ」に。

2016年12月に制定された部落差別解消推進法は、第1条で現在もなお部落差別が存在するとともに、情報化の進展に伴って部落差別に関する状況の変化が生じていることを踏まえ、部落差別のない社会を実現することを目的としている。

※ここで「情報化の進展に伴う状況変化」とは、インターネット上の差別扇動、差別書き込みの氾濫をさす。

2019年法務省の差別情報実態調査によると、「ネット上で差別情報を見た人は42%で、その内36%は、そのことを不当でない」と思っている。つまり、根拠もないのに、差別されても当然と思う人が3割強居ることになる。ネット情報を見ても、それが事実かそうでないのか判断できる力をつけなければならない。

(2) 最近の大分県で起きている部落差別事象の課題としては、

- ・ 賤称語の使用は、命につながる重みがあることをどう伝えるのか
- ・ 現在の部落差別をどう伝えるのか
- ・ 部落問題・人権問題と自分自身の関係をどうもたせるか
- ・ ねたみ意識、偏見を克服する教育・啓発をどうするか
- ・ 全国に2割いる「部落問題解決のために自然解消論は良し」をどう克服するか

(3) 同和対策に関する特別措置法は終わったが…

同和対策関係の特別事業法の時代からある同和地区指定を受けていない地域（未指定地区）の問題に関しては、未指定地区の差別実態は放置されたままであり、その隣接地域を含めて、依然として部落問題に関する予断、偏見が残っており、啓発のあり方も課題である。

第2回学習会

10月7日に全体研修を2講座しました。義務制21人、高校16人、社会教育関係17人の参加でした。全体研修1では、「ESDにおける部落問題学習の位置づけ」を確認しました。部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消に向けた教育を実践することは、SDGsの「1. 貧困をなくそう、4. 質の高い教育をみんなに、5. ジェンダー平等を実現しよう、10. 人や国の不平等をなくそう、16. 平和と公正さをすべての人に」などの目標の達成の担い手を育てることになり、文部科学省が提唱している2020年代の教育の基盤となる理念「持続可能な社会の創り手を育む教育」ESD (Education for Sustainable Development) の一端を担うこととなる。

全体研修2では、「授業研究 ～アクティブラーニングによる部落問題学習～」と題して

(1) SDGsから部落問題学習につなげる提案 県人教事務局

(2) 中津北高校からの提案 ～DVDによる授業風景と当日の学習指導案について説明～

という内容で授業研究を行いました。

第3回学習会

11月4日（木）にフィールドワーク（玖珠・九重方面）と部落問題懇談会を行いました。参加者制限したため、義務制7人、高校5人、社会教育関係18人の参加でした。

（詳細は、ニュースじんけん142号参照）

第4回学習会

2月3日に予定していた第4回学習会については、新型コロナウイルス感染症拡大で大分県は感染状況の評価がステージⅢになり、県人教の研修等に関するガイドラインに従い中止にさせていただきました。すでに3名の方から実践レポートの提出がありましたが、これらのレポートを基にした実践交流学習ができずに、申し訳なく思っています。今後、来年度に生かす企画をしていきます。



共に生きる社会をめざして その6

わたしたちは 「通用するまで努力し続ける社会」をめざすのか

今年度の特集シリーズとして立ち上げた、「共に生きる社会をめざして」でしたが、会員様から、本当にたくさんの方のコメントを投稿いただき、何とか続けていくことができました。紹介できなかったコラムもありますが、今回は2人の方の思いを紹介します。

<一緒に過ごす>

所属した学年に、場面緘黙症のユウタロウさんがいました。その前の年もユウタロウさんをみていた先生から「ユウタロウさんが書いているのを見て、『ユウタロウさんは〇〇って書いてるよ』って言ったりしている。」と聞かされていました。

まだ顔と名前が一致していない頃、理科室で授業をしていた時、ユウタロウさんが大事なことをノートに書いていました。私が「ユウタロウさんが大事な言葉を書いている。」と言うと、隣に座っていた子がユウタロウさんのノートを見て「体積!」と答えました。私が言わなくてもいいんだと思いました。



化学式を覚えるために、ペアで問題の出し合いをすることにしました。ユウタロウさんたちはできているだろうかと心配になり、見ていました。ペアのユミさんは問題を出した後に「わかった?」と尋ねています。ユウタロウさんはそれにうなずいていました。ユウタロウさんが問題を出す番になると、化学式とその名称が書かれた一覧表を使って、答えになる部分を隠し、問題を指さしていました。それを見てユミさんが答えていきます。うまいことやっているなあと思いました。



別の日の放課後、ユウタロウさんとリョウさんの二人が花壇の手入れをしていました。通りすがりに見たのですが、二人はニコニコして楽しそうでした。花壇の手入れが終わってからは2人で追いかっこをしていました。

そんな姿を見たので、後日、リョウさんに、「もしかして、ユウタロウさんはリョウさんと二人だけの時はしゃべるの?」と聞きました。すると、「いえ。あの人は学校では一切しゃべりませんから。」と返ってきました。

子どもたちは一緒に過ごすことで、難しいことを考えなくてもインクルーシブになっていくのかなと思いました。

先生やおとなが常に導かねばいけないというような責任を感じてしまう方も少なくないようです。しかし、おとながいない場所でも子どもたちが大きく成長する姿に、私たちはこれまでも出会い続けてきたのではないのでしょうか。同じように高校からも、子どもたちが自分自身で学び続ける姿が届いています。

＜コロナ禍での、視覚「障害」者の切なる願いにふれて＞

本校では、今年も（株）ソニー・太陽さんとの交流を1学年対象に行った。今年は本校に訪問してもらい、白杖（はくじょう）体験などを行った。また11月に実施した公開人権HRAでは点字をテーマにした学習を行い、視覚「障害」者への理解を深めることができた。



その影響もあり、総合学科3年の担当ゼミの生徒の一人が、「視覚『障害』者の願い」というテーマで卒業研究論文を発表した。内容は「視覚『障害』とは?」「視覚『障害』の種類」「点字とは～校内にある点字～」等、多岐にわたるものであり、分かりやすく丁寧にまとめられていた。感心しながら発表を聞いていたが、最後の「コロナで変わった視覚『障害』者の生活」というまとめを聞いた時、はっとした。

「『(いわゆる) ソーシャルディスタンス』が分かりづらい。」「スーパーのレジに並ぶのに距離感や進み具合がわからなくて困った。」「(コロナ禍なので) 周囲に手引きなどのサポートを頼みづらい。」「(感染症対策で) 商品などを触って確かめることができにくいく。」「店の入り口などの消毒液の置き場所が分からない。」等、コロナ禍によって活動できる範囲そのものが極端に狭まってしまったというきつさが伝わってきた。



私は、盲学校に勤務していた経験を生かして、視覚「障害」者をテーマにした学習を提案して生徒たちに理解を促すつもりであったが、私自身が肝心なものが抜けてしまっていた。現場を離れてしまうとどこか他人事になっている自分に気づかされる。今回子どもたちと一緒に学習に取り組んだおかげで改めていろいろなことに気づくことができた。子どもたちに感謝したい。



「インクルーシブという理想はわかるが、社会はそんなに甘くない。『きれいごと』ではないか?」と言う方も私のまわりにいました。それとあわせて、「そんなことでは、社会で生きていけないぞ」ともよく言っていました。みなさんも聞いたことがあるのではないのでしょうか。前半の「そんなことでは」を、「できないままでは」「今のままでは」という意味だと捉えると、「(あなたは) 今のままでは、将来どこにも通用しないぞ」ということになります。何とも冷たい言葉ですね。

叱咤激励のように聞こえますが、そう言われて育ってきたわたしたちおとなは、その言葉通りに「通用しなければならぬ社会」をつくってしまいました。それは日本の自死者の現状からもわかってきます。では「通用するまで努力しよう!」と言えば良いのでしょうか。努力したら通用するようになるのでしょうか。自死、過労死…社会的な「強者」も生きづらい社会が現実にあるように思います。

「通用するまで努力を続ける社会」と「ありのままで助け合う社会」とでは、どちらが実現可能でしょうか。ありのままで通用する、助け合い支え合う社会に変えていきたいと思いませんか。その方が実現可能だし、楽しそうです。冷たい社会で生きていこうと鍛えるより、ありのままで生きていけるやさしい社会に変えていきましょう。そのためには、困りに気づき、支え合える授業・教室・学校、そしてまちをつくるのです。わたしたちにはそれができると信じています。





都同教、「南葛」の桐畑さんのこと



東京都同和教育研究協議会（以下 都同教）事務局長であり、都立南葛飾高校定時制（以下、南葛）教諭の桐畑善次さんが2022年1月16日に亡くなられた。7月2日の第1回オープン講座で「私にとっての部落とは何か」をテーマに語ってもらった。あのときの彼の姿をオンラインで見た方は、かつて、全人教研究大会の分科会で報告者の気になる部分に南葛の生徒と向き合った実践を差し出し、会場にいる方にも「なかまとは」、「真の解放とは」について思いを伝えていた姿とは違い、今は穏やかで治療の影響で髪がばっさり無くなっていたことに驚かれた方も多かったと思う。

そのオープン講座の桐畑さんの話の中で、差別者であった自分について語る場面があった。

高校時代に人権学習で「部落の人との結婚はどうするか」というテーマでグループ討議した時、私は、「それって、むずかしいんじゃないか」と答えていた。ところが、あることがきっかけで、クラス生徒の住所一覧を見てしまった。そのことで、自分のクラスに部落出身の子がいたことがわかり、あの時の人権学習でいい加減な発言をしてしまったことを思い出した。自分の発言をその子はどんな思いで聞いていたのだろうと思うと、差別者であることの自覚ができたし、もうこんなことはしたくないと強く思った。

この話で、私は、自分が小中高社と過ごしてきた中で、「自分は差別者かもしれない」「差別はしていないつもりでいたのに」「差別者であった自分が、今どうなのか」等、自分と部落問題、自分と人権侵害について振り返るきっかけをつくってくれたと思っている。

10月25日に東京で全人教の文部科学省要請行動があった。毎年、そこでも桐畑さんに会えた。そこでの彼は、必ず学校での生徒や教員の具体的な困りを出しながら、進路保障の充実を訴えていた。その彼が今回の要請行動の場に居なかった。やはり体調がよくないのかと心配してメールを送ってみた。返信メールには体調の思わしくないことと「なんとか頑張って乗り切りたい」と書かれていた。

2021年12月6日、桐畑さんから、かすれた声で息を切らせながらの電話を受け取った。きつそうだった。彼は、療養しながら第72回全国人権・同和教育研究大会（コロナ禍のため、新潟開催できず、報告資料集の発行のみ）冊子を読んでいたら気になるレポートがある、一度読んで話をきかせてほしいということだった。そのレポートは、「障害」にかかわる当事者の生徒のことが書いてあったが、教員がそのことで、生徒や保護者と関わりがもてないまま、「障害」をとりまく課題を書いているなどと思った。そのことを桐畑さんに伝え、「そんなことじゃない、この子が輝いていない。深くに関われば、その子が立場を自覚し、問題提起し、差別と闘える素地のあるのに、なぜ、傍観、放置しているのか、残念でならない。いずれ、このレポートをたたき台にして、学習したい」と熱く語った。全人教研究大会が冊子の発行のみで終わったことで、レポートだけを読むと、その行間にある報告者の実際の行動や思いや「分かっているつもり、勘違い」を確認できないため、消化不良となってしまうことは否めない。その悔しさが桐畑さんと話していて、ビンビン伝わってきた。

桐畑善次さんとの関わり的一端を紹介し、哀悼の意をしめします（あ）。

合掌。

※桐畑さんの最近の実践は『部落解放 増刊号 2020 796号』の特集「解放教育」の中で「8年目の答辞～南葛の教育、『全入・無退学』の学校をめざして～」と題して、掲載されています。

こどものまなざし

このコーナーでは、今年度の人権作文集「ひかり」に掲載された作品を紹介していきます。子どもたちが日常生活の中で考えたこと、感じたことなどにふれ、子どもたちの姿から学んでいきたいとします。

十人十色 ～一部抜粋～

私は母がフィリピン人、父が日本人のハーフとしてフィリピンで生まれました。ハーフという呼び方自体、一種の人種差別かも知れませんが、日本ではこの呼び方なのであえて「ハーフ」という表現を使います。

小学生の時、友だちから「〇〇ちゃん肌やけちよと？ハーフだから？」と言われたことがあります。私が「なんで？」と聞くと「そんなイメージがあるから」とその友だちは言いました。「イメージ？」それを聞いてハーフというだけで特別視されているのがとても嫌でした。私の母も、日本で働く職場で漢字が読めない、書けないという理由で言葉の暴力を受けたと聞きました。

人種差別、黒人差別がこんなにも身近で起こっています。言葉だけでも人種差別という暴力です。私は多種多様な人がいるこの地球が好きです。みんなそれぞれの個性を持っています。周りとは違うからで無く、個性だからと受け入れていく環境を私たちがこれから作っていくべきと思いました。十人十色、人それぞれ。みんなで手を取り合って受け入れていく世界はそう遠くない未来だと私は思っています。

人権作文集ひかり 2021 【第33集】

日田市 高等学校 二年 S・Nさんの作品より

S・Nさんがこの作品を通して一番伝えたいことは、「人種差別、黒人差別がこんなにも身近」にあるということではないかと思いました。私たちはともすれば、差別は自分の身のまわりにはない、ましてや人種差別などあるはずがないと思いきこんでいるかもしれません。

S・Nさんはきっと、自身の個性を受け入れてもらった経験もしていることでしょう。だからこそ最後に、「みんなで手を取り合って受け入れていく世界はそう遠くない未来」だと記しているのではないのでしょうか。そしてそれはS・Nさん自身の、「十人十色」な他者と手を取り合いながら豊かに生きていきたいという願いでもあるのでしょうか。

ちやみちゃん
じぶん。の巻



近くの学校が休みになったり...
お隣さんがずっと家にいたり...

しんどいなあと思う人は
自分だけではないはず

心の距離は
あけないようにしたいですね

INFORMATION

第15回ヒューライツ作品展 入賞作品の紹介

ヒューライツ作品展に対して、県内各地よりたくさんの応募ありがとうございました。2021年度のテーマは「なかま」でした。様々な困難と一緒に乗り越えてきたなかまや、嬉しいときも悲しいときも支え合ってきたなかまのことを思える作品が届きました。

また、昨年までは人物写真だけでの開催でしたが、今年度より制作物も写真に撮って送っていただけるようになりました。

「最後の大会を終えて」

山口 浩史さん(竹田市)



「けん玉楽しいね」

河向 あかりさん(佐伯市)



「いろんなぼくと、たのしいなかま」

蛸原 琉星さん(佐伯市)



「竹馬、馬乗り」

吉田 巧さん(別府市)



「みんなで、うれしい!」

大田こども園さん(杵築市)



「雨がやんだらみんなにあえるね」

牧 久美子さん(大分市)



入選されました6点の作品は、2022年度の県人教事業の中で、学習・啓発の具体的なイメージとして活用させていただきます。ヒューライツ作品展は次年度も開催しますので、テーマが決定しましたら、ふるってご応募をお願いします。